Café des 三浦一族

open

Menu　第１２回

佐奈田義忠と長尾定景

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館　郷土資料室）

治承4年（1180）８月、源頼朝は平家打倒のため、伊豆で源氏恩顧の武士らとともに挙兵しました。頼朝は、同17日、８０騎余りで目代（任国に下向しない国守の代わりに現地で執務を行った私的な代官）の山木兼隆を攻め、これを滅ぼします。この挙兵当初から、軍勢に加わっていたのが三浦一族の岡崎義実と子の佐奈田義忠でした。義実は、三浦義明の弟で大住郡岡崎（伊勢原市）・同郡真田（平塚市）周辺を本拠地としていました。義実父子は、事前に頼朝から山木攻めに加わるよう求められ、17日の合戦に加わりました。その後、頼朝勢は、相模国土肥郷(湯河原町)を経て、23日に石橋山（小田原市）に布陣します。しかし、この時、平家方の大庭景親ら相模や武蔵の武士ら3,000騎程も石橋山付近に陣を構えており、さらに頼朝勢の背後には伊豆の伊東祐親の軍勢300騎も迫っていました。平家方は、この時、頼朝勢の援軍として現地に向かっていた三浦義澄ら同一族の軍勢の到着を恐れ、その到着前に300騎程の頼朝勢を討つ作戦に出ます。こうして、大庭勢ら平家方は、頼朝勢を攻撃しますが、この時、頼朝勢の先陣をつとめたのが義忠でした。死を覚悟した義忠は、郎等の文三家安(ぶんぞういえやす)とともに夕闇の大雨のなかを出陣し、戦場で大庭景親の弟の俣野景久と遭遇します。両者は組み合いとなり、馬上から転げ落ち泥まみれの揉み合いの末、義忠は景久を組み伏せましたが、自らの郎等が近くにおらず、逆に景久方の長尾為宗が接近してきます。為宗は、あまりの暗闇でどちらが敵か味方かわからず、手出しすることができませんでしたが、その後、鎧の毛の感触から、上で組み合っているのが義忠と気づきます。これを察知した義忠は為宗を蹴り飛ばし、刀を抜いて景久の首を掻き切ろうとしますが、刀が抜けません。義忠は、景久と組み合う前、岡部弥次郎という人物を斬っていましたが、その血糊を拭かずに刀を鞘に納めたために、刀が鞘から抜けなくなっていました。こうして手間取っている間に、為宗の弟の長尾定景が背後から組みかかり、義忠は首を斬られ、25歳の若さで討死しました。また、義忠郎等の文三家安も稲毛重成の手勢と戦い、討ち取られました。

真田与一義忠御真像
（横須賀市立中央図書館蔵）

この石橋山の合戦で頼朝勢は敗北しましたが、その後、戦いの形勢は逆転し頼朝は鎌倉入りを果たします。義忠を討った定景は捕えられ、その後、義実のもとに預け置かれました。しかし、日ごろから法華経を持し転読を欠かすことがなかった定景の姿を見た義実は、頼朝に厚免を嘆願し、頼朝もこれを認め、定景は罪を赦されることとなりました。これをきっかけに、定景ら長尾氏は、三浦一族の郎等となります。定景は、3代将軍源実朝を暗殺した公暁を三浦義村の命で殺害したことで知られますが、定景の子孫らもその後の宝治合戦で三浦方に与し、三浦一族と共に戦死しました。それでも、定景の末裔にはその後も残っていく系譜があり、それらは室町時代に関東管領として活躍する上杉氏に仕えます。その長尾一族の系譜をひく越後の長尾景虎は、戦国時代、上杉家の名跡を継ぎ、名を上杉政虎と変えますが、この政虎こそ、後の上杉謙信です。戦国武将として有名な謙信ですが、その系譜を遡ると、三浦氏と長尾氏との深い関わりが見えてきます。

さて、石橋山の合戦後、頼朝は自分に忠義を尽くした義忠の幼い遺児らの命が敵から狙われることを案じ、義忠の母に専使を送り、身の安全を図りました。また、頼朝は、義忠の菩提を弔うため、證菩提寺（横浜市栄区）を建立しました。一方、義実は、石橋山の合戦時、すでにかなりの高齢となっており、さらに、跡継ぎの義忠を失った影響もあったことから、晩年は、北条政子のもとを訪れ所領の窮乏を訴えています。その約３か月後の正治２年（１２００）6月、義実は８９歳で没しました。その後、和田合戦において、義忠の子の岡崎実忠や義実の子の土屋義清らがともに和田方に与したため殺害され、岡崎氏の系統は姿を消していくこととなります。しかし、石橋山の合戦の功労者であった義忠の追善供養については、その後も鎌倉殿や北条氏によって引き継がれていきました。

石橋山の戦場で、生死を分けた義忠と定景ですが、その後の一族の運命も大きく変わっていくこととなるのです。

■『まなびかんニュース』の主な配布場所：まなびかん(生涯学習センター)･市役所･行政センターやコミュニティセンターなどの公共施設をはじめ市内のJR・京急各駅、主な郵便局や金融機関、医療関係機関などに置いてあります。